



地味チョウシリーズ⑦

キバネセセリ

Burara aquilina



「 しばしば大発生し、札幌市内の高校では1991年7月8日から2週間弱、次々と教室内に侵入する個体がみられた。最も多い日には1教室当たりで5匹となった。その間屋上での観察では、北西にある藻岩山から上空を移動する個体を多数見た。」

「完本」に兄拓行が書いた兄らしい文章です。兄らしいというはどういうことかと
いうと、とにかくわからないことはわからないと書き、記録していることはちゃんと書こうと常々言っていたのです。それに比べ私の文章は当たり障りのない文章で、どうにも差が出てしまったように思えます。

さてそれはともかく、地味チョウというよりは嫌われチョウともいえるキバネセセリについて、観察してきたことを、思い出しつつ紹介していくことにしましょう。



成虫いろいろ①吸蜜

キバネ君は花が好きです。いろいろな花に来るのですが、ちょっと珍し目の写真からいきます。右の写真はヒメジョオンです。下の左はシソ科のミソガワソウ。エゾツマが飛ぶ林道で撮影したもの。右下はアポイ岳の登山路に咲いているハクサンシャクナゲです。



吸蜜の②

キバネ君が一番好きな花は林道に咲くイケマではないでしょうか。花が咲いていれば必ずと言っていいほど集まっています。花はそれほど目立たないのですが、確かに香りが強いので、これに引かれるのでしょうか。同じ科のガガイモにもよく集まります。「完本」の兄の写真にガガイモで吸蜜していてストローが抜けなくなったというトンマな写真があります。



2012・7・22 伊達市



2012・7・12 伊達市



吸汁・吸い戻し

キバネ君は花の蜜の他いろんなものを吸います。下の写真は「道新本」に載せた私の手の汗を吸う♂。その下はリュックに染みついた汗を吸っています。樹液も吸いますし、吸い戻しもよくやっています。



産卵とその後の謎

キバネ君の生態とくに若齢期は意外に知られていません。産卵行動も見たいと常に思っているのですがまだ出会えません。下の写真は「完本」から使いまわされて兄の写真です。バイブルの「生態図鑑」では、『幼虫が造った巣の内部から発見されている。長野県で現在まで得られてる卵塊の発見はわずか数例』とあります。確かに私も若齢時の巣の内部から数例発見しています。右の写真がそれですが、全部孵化しています。「生態図鑑」では『孵化と同時にその年のうちに中齢まで生育する』グループがあるよう書かれていますが、『野外においてはまだ調べられていない』という記述もありなんだかよくわかりません。葉を食べた食痕は見当たらず、そのまま樹の方に移動するのでは、と思いますが、私も確信はありません。まだ謎なのです。

1991・8・11 札幌市
(兄拓行の写真)



2019・8・5 富良野



折りたたまれていた巣の中の卵塊 2018・9・18 富良野



産卵後ふ化した直後と思われる卵塊 2018・8・7 富良野

越冬生態に挑む

2014年は退職しのんびりしていたのですが、突如図鑑作りが降ってわいてきました。作るなら「Complete:完本」をめざそうとなり、普段ほったらかしにしていた地味チョウもじめに調べなくてはなりません。キバネの越冬巣探しに挑みました。前のページの兄の写真がその手掛かりです。結構太いハリギリの樹皮の隙間に卵を埋め込んでいます。まずこれを探し当てることから始めました。 2014年11月24日。フィールドは朝日ヶ丘公園（通称なまこ山）。なんとか「なまこ山」発見しました。写真（下）のように幹からニヨキっと出ている小さな枝の基部に卵塊の殻がありました。その周辺をマイナスドライバーでパキッと樹皮をはがすと幼虫が見えたのです。一人森の中で「やったあ」と声を出していました。

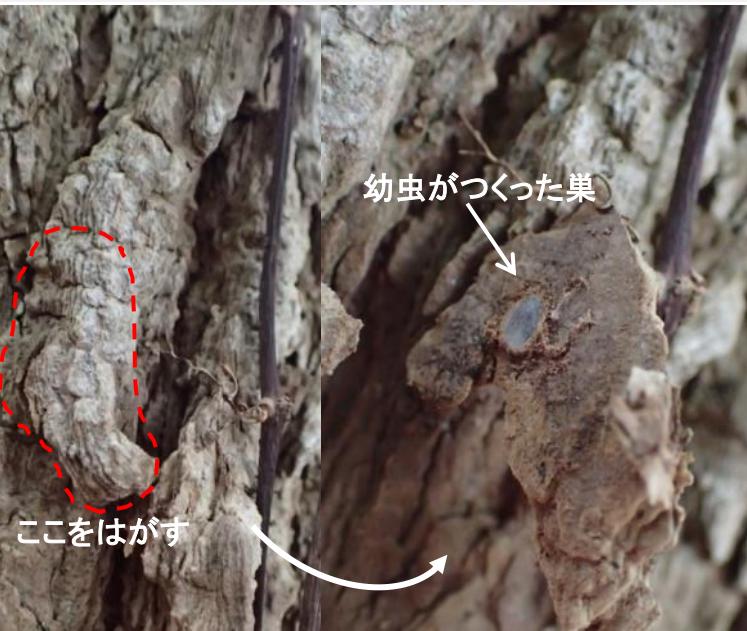


越冬巣その2

前のページの続きです。2022年の鳥沼公園での写真です。ハリギリの幹にふ化した卵塊が付いています。幼虫は樹皮の出っ張った部分に隙間から侵入してコルク層の外側あたりに穴を掘り、外側に薄い膜を張って中に入っています。前のページの幼虫は1齢に見えますがこの幼虫は2齢のように見えます。いずれにしろ、冬越しのため実に手の込んだ越冬巣をつくっています。コチャバネのように葉を綴って寝袋型の越冬巣をつくるというのでさえ見事だと思いますが、この冬越し戦略はその上をいっていると思います。どんな進化の過程でこの習性を身につけたのでしょうか。

キバネセセリの仲間はアオバセセリ亜科に属し主な生息地は東洋区と聞いています。なんでこんな富良野の様な寒いところまで来て住むようにしたのでしょうか。ハリギリなんぞを食樹にするからこんなことになったのでしょうか。

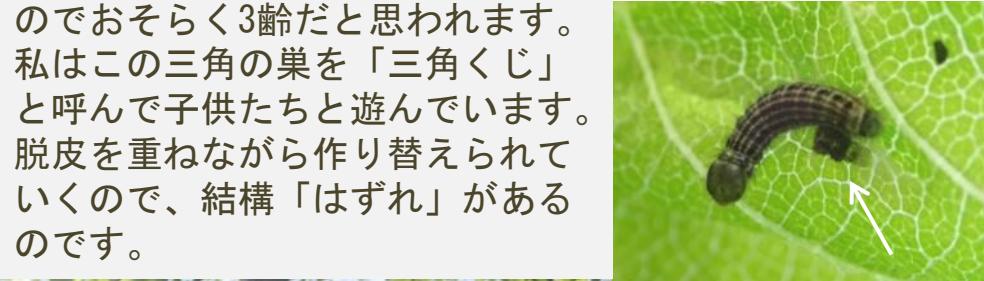
このページの写真はすべて2022年9月18日富良野鳥沼公園で撮影したものです。



春の幼虫探し



翌春5月になりました。8月から9か月にも及ぶ長い冬眠から目を覚ました幼虫は例の越冬巣から出て、展開してきた若葉を食べ始めます。と言ってもこの様子はまだ見ていません。見つかるのは葉に巣ができるからです。左の写真は葉の先端を綴じあわせた巣をつくっていました。下の写真は葉の先端を三角に折りたたんだ巣になっています。開けてみると幼虫がいました。脇に脱皮殻があるのでおそらく3齢だと思われます。私はこの三角の巣を「三角くじ」と呼んで子供たちと遊んでいます。脱皮を重ねながら作り替えられていくので、結構「はずれ」があるのです。



若齢の巣 2019・5・18 富良野市



初夏の幼虫探し

6月に入るとハリギリの葉は立派な手のひら型に広がります。下の写真は高校の授業で虫捕りをしているところです。ここでも三角くじに挑戦させています。開けてみると『大当たり』立派な終齢幼虫が出てきました。



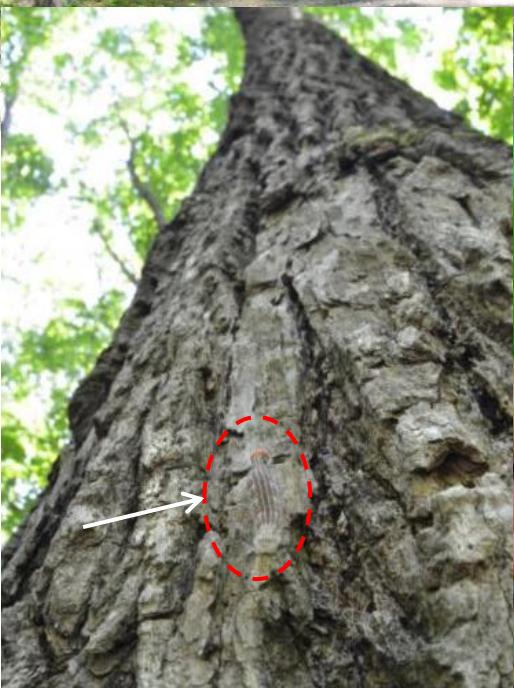
虫捕り授業 2020・6・9 富良野市なまこ山

幼虫がいた巣 2020・6・9 富良野市



巣の中にいた終齢幼虫

初夏の蛹探し



高校の授業の続きです。いつもの「なまこ山」。いつものコースを歩いていると、生徒がこれは採るべき?と指差す先にキバネの幼虫がハリギリの幹を登っています。別の生徒がこっちにもいるよ、と指差す先にキバネ君が道を歩いています。これはキバネセセリという蝶の幼虫云々と講釈して、その辺の草むらを探すと前蛹や蛹が見つかりました。キバネ君の幼虫は女子には結構モテていました。これが成虫になると逆に嫌われる羽目になるのですが…。写真はすべて2020年6月16日：なまこ山



幼虫地面をワンダリング



前蛹



蛹

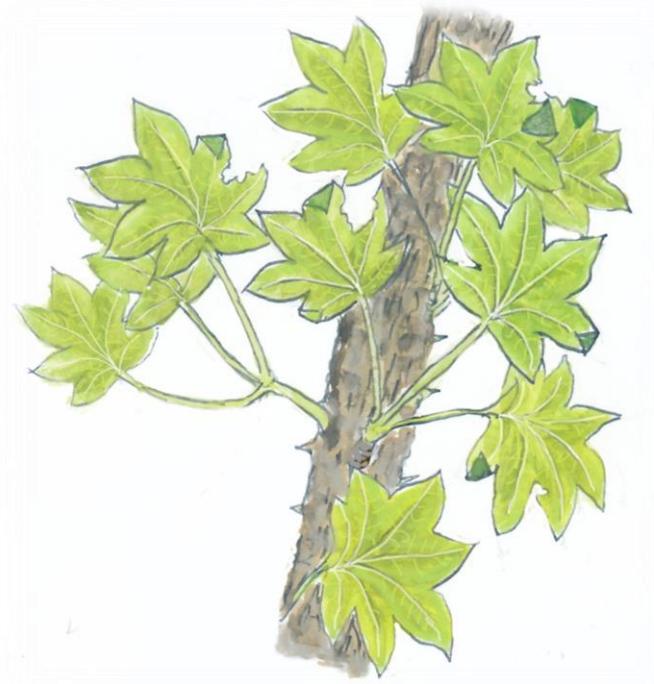
ということで私の持つ情報を紹介しました。なんだか変わった蝶だとつくづく思います。

またここで「完本」の兄の記述を載せてみます。これらの観察は私がまだ出会っていないことなのです。

●「メスは日中から午後にかけて多くはハリギリの枝に来て、幹の周りを旋回しながら次第に降下し樹幹に静止し、表面の裂け目や食害された穴などに腹端を差し込んで数十秒から数分かけて多数の卵を産んだ。産卵位置は地上1m～2mに多かった。」

●「幼虫は夜間摂食し日中は巣の中で静止している。終齢幼虫は、巣の縁に頭をこするようにして音を立てる。」

まだ謎の生態部分も残っています。これからまたもう少し真面目に彼らを追ってみたいと思いました。



To be continued